

我が家

一年甲組 鈴木安藏

路はまだ踏み分けた人の足跡がない。たゞ隣のボチが嬉し様に走りまはつて遊んで居る。庭の呉竹も雪に壓しつけられて、いと苦しい様に頭を垂れて居る。雀が庭の木々の枝から、枝へ飛びうつると同時に落下する白雪の様、實に春の花の散るが様である。近所の子供等は早や起き出でたのか、裏の方で騒いで居る。大方雪達磨でもこしらいて居るのだらう。間もなく牛乳屋が車を挽いて、雪を蹴破りながら威勢よく走つて来る。續いて新聞屋も。

時經てガサ／＼と音がした。ハット思つて見れば呉竹の雪が落ちたのである。竹はむつくりと起きたさぞ／＼竹も喜ばしいだらう。

鶏が小屋の中でさつきからコ／＼と鳴いて居る腹でもすいた爲だらう。納豆賣の婆さんが白い息を吹きながら、納豆／＼と憫れにふれながら裏の路を西の方へと行く。?

我が家は小高町にありて、さ／＼やかなる雜貨を商ふ一家なり。四圍の風景甚だ麗美にして四季、眺望にたれたることなし、即ち春は燕の宿となり夏は滴らんとする木々の緑をうけて、涼しさに酔ひ秋は燃ゆるが如き紅の遠山を一望に收め、冬は又白く皚々たる壯峰阿武隈山脈を遙に仰ぐ。

今我が家の歴史を語らんと涙多し。衰替の悲運に遇ひたる我が一家はこの秀麗なる町の一角に僅ばかりの資本により、さ／＼やかなる店を開きて糊口しをるなり。

盛運一度乗すればうの極を知らず、又悲運一度到れば衰替の限なしと云。

その昔昨日迄は己が田畑山林よど人々に誇りし我が家も一度祖父が事業に失敗せると、父が急の死との爲に、今日は數多ある山林田畑も悉く入手に渡り今迄は富豪の夢路をたゞれるも、今は一變して貧しき人々の群に入るに致りぬ。

月日は流れ／＼てはや十有五年の昔となり、今は己が身の成長を待ちて再び盛なりし昔の我が家に返さんと一家共同してこのまづしき事業に勵みつゝあるなり。

かゝる苦境に打ち耐へて成長し來れる自分の双肩は實に我が一家の盛衰を荷ひをるなり。さらば自分たるもの大いに覺醒し勉強せずして可ならんや。

天は自ら助くる者を助く。然らば貧しき我が家の盛運に乗じて樂しかりし古に返さん日も近かる可し

早起と吾人

一年乙組 新妻三男

寒氣膚を劈く此の頃となれば、兎角起きるを厭ふは小人の通弊なり。實に戒むべき事ならずや。幸にして吾人は旦夕師の許にありて、其の有害無益なるを訓へられ、且つ誠められつゝあれば、徒に懶民するが如きゆめあるべからず。

抑も早起は、精神を爽快にし、四肢を健全ならしめ、延いては長壽に効あるものなり。之を思へば徒

に曉の夢を貪るが如きは、恰も自ら心身の懦弱を敢へて招くに異ならず。吾人若し健康長壽を保ち、他日偉人となり、大事業家となり學者とならんと志望する時は、先づ早起の習慣を養ふに若くはなし。古諺にも『朝起は三文の得』とあるは畢竟早起の大切なるに慮りての謂なるべしと信せらる。然も、其の實早起の得は此の如く簡單なるや否やは則ち實行せざれば、其如何は知り難かるべきなり。

見よ古今東西を問はず英雄豪傑と崇拜せられ名を千載の竹帛に垂るる人々は、多くはこれ早起の人より出でたるを。諸君よ、この光輝ある皇國をして、眞の富國強兵たらしめんと欲せば、擧つて早起の奨励と習慣との實を擧げんことを希望して息まざるなり

講談會の模様を報ず

一年甲組 滑川 滋

拜啓秋冷之候益御健勝の由奉賀候降つて私も變り無く候間御安心成し下され度奉願上候

さて本校にては年中行事の一として衆人の前にて